『世界臨時増刊　世界を読むキーワード4 』634 号　1997. 4. 1発行
1997-42　pp. 342〜345　岩波書店

6-05

一緒に暮らす理由

橋爪大三郎

人間は社会的な動物である。たった一人で生きていくことは不可能だ。野生動物のなかには、繁殖期を除いて単独で行動するものがあるが、人間は生まれてから死ぬまで集団で行動する。

それでは、人間のつくる集団は、動物の群れと同じかというと、はっきりした違いがある。人間の場合、共同生活をする持続的な小集団(家族)と、それらが集まった全体(社会)とが分かれていて、いわば二段階となっている。いっぽう動物の群れは、ペアとなるオスメスや親子関係にあるものを含め、ただ単に個体がごちゃごちゃ集まっているだけで、一般に、はっきりした内部構造を持たない。家族とは人間に特有な現象なのである。

家族とは何か？ 家族の定義はいろいろあるが、簡単に言えば、**夫婦**(結婚した男女のペア)とその子供からなる、共同生活の単位である。たまたま子供なしの家族や夫婦の一方が欠けている家族もあるが、もしいれば、家族として一緒に生活するのがふつうである。

人間はなぜ、家族をつくるようになったのか？

人間は、直立歩行する関係で、骨盤の幅が狭い。それなのに知能が発達し、頭が大きい。当然にも、難産となる。そこで人間は、早く生まれるようになった。その結果、人間の赤ん坊は、自分ではほとんど生活ができず、何年も親に育ててもらわなければならない。母親は授乳しながら、子供にかかりっきりになる。ではその期間、誰が彼らの食料を取ってくるか。この必要のためか、人間のメスは性周期(発情期)がなくなって、のべつセックスできるようになった。そこで母親は、特定の相手(オス)にセックスをさせてやり、その代わりに食料を持ってこさせる。つまり、養育▼結婚▼家族というプロセスをたどったのではないか、というのがひとつの仮説である。[1]

ほかにも仮説はいろいろ考えられているが、それをいちいち紹介するのはやめて、つぎに、家族がどういう機能を果たしているかを考えてみよう。

動物が行なわず、人間だけが行なう行為として、**葬式**がある。動物は仲間がライオンに喰われたり、病死したりしても、黙ってみている。けれども人間は、

死体を放置せずに、必ず葬る。人間の身体が単なる物体にすぎないと考えれば、これには合理的な理由がみつからないが、しかし人間はそうせざるをえないのである。

これは人間が、家族を営むことと関係が深いと思う。子供の時から親に育てられ、長い年月を一緒に暮らした子供は、生活能力をなくしていく親の老後を世話し、最期を看取る。そしてその亡骸を、敬意をもって葬るのである。

家族は、生活能力のない個体(子供や老人)の面倒をみて、彼らの生活を保障する。そういう機能をもっている。生活能力のある個体からみると、これは持ち出し(面倒をみるだけ損)のようだが、しかし、自分もかつて(そしていずれ)生活能力がなかった(なくなる)ことを考えれば、一種の保険に入っているようなものだ。互いに助け合うという家族のモラルは、長期的にみて、合理的である。

家族は**家計**をひとつにする(食料や財産を共有する)。家族の外側(一般社会)では、交換の関係が成り立ち、資源をどう分配するかが問題となる。けれどもそうした関係は、家族の内部には入り込まない。家族のメンバーは互いに、それ以外の人びとの関係よりも強い絆で結ばれ、互いに助け合う義務を負っている。人びとは、家族の一員としての行動を期待されている。

家族のもうひとつの機能は、つぎの世代を再生産することだ。

家族のなかで育った若いメンバーは、家族の外に結婚相手を探すことになる。この決まりを、近親相姦の禁忌(インセスト・タブー)という。この原理によって、子供の少なくとも一方は、親と暮らすことをやめ、家族を出ていく。そして、新しい家族に参加する。家族はこうして、メンバーを入れ替え、新しくできたり壊れたりしていく。

結婚した夫婦は、どこに住むか。夫の家族と住む父方居住(patrilocal residence)。妻の家族と住む母方居住(matrilocal residence)。母方のオジと住むオジ方居住(avanculocal residence)なんていうのもある。いわゆる未開社会では、このどれでなければならないか、規則で決まっている場合が多い。

子供が何人かいれば、新しい家族がいくつかできる。それらの家族は、互いに連絡を保って、より大きなネットワークをつくる。これを**親族**という。

家族は一緒に暮らしているが、その理由はなんだろうか。

家族は、夫婦と親子からできている。夫婦は、相手

[1]…「家庭にセックスを持ちこまない」ことにしている夫婦、の話を聞いた。非核三原則にひっかけた、よくできた冗談かと思ったら、本当だという。結婚した夫婦は、適当な間隔でセックスする。世界中の文化で、それが当たり前になっている。けれども最近わが国では、病気でもないのに、そして嫌い合っているわけでもないのに、セックスなしで一緒に暮らす夫婦がぽちぽち現れているらしい。夫婦を役割と考えれば、セックスは義務である。恋愛時代とは違う。「義務と演技」をこなして、ひとつ屋根の下で夫婦を演じているカップルがさぞかし多いことだろう。そうした自分の姿をみつめ、やりたくないことはしないと決めれば、セックスレス夫婦になっても不思議でない。プラトニックではなく、セックスレス。道徳や規範を離れて、自由にセックスするフリーセックスの余波が、セックスしない自由もたぐり寄せてしまったのである。

新しい「家族」の形態
同性愛（ゲイやレズ）のカップルも法律的に結婚できるとする判例が、アメリカであい次いだ。彼（女）らが養子をとって、家族として暮らすケースも増えている。結婚しない友人同士が、ルームメート以上の、家族として集団生活するスタイルも珍しくない。
日本の大学生はアパートの一人暮らしを好むのに対し、欧米の大学生は大きめの借家をシェアすることを好む。家族が人為的な集合であり、役割の束であるという観念が行き届いているせいだろう。その延長として、家族として暮らすことを選択すれば、誰とでもそうできるという発想がある。子連れ再婚同士の大家族。ハーフ・ブラザー、ハーフ・シスターは当たり前だ。そんな背景があるから、ノーマルな「家族」に収まり切らない人びとの集まりとしての、新しい「家族」も受け入れられる

を選べる関係だけれど、親子は選べない。したがって、一緒に暮らしているといっても、どういう関係にもとづくかによって、少なくともふた通りの理由があることになる。

夫婦は、互いに相手を選びあって、一緒に住んでいる。昔は本人に選択の自由がない結婚が多かったが、その場合でも、彼らの親や周囲が相手を選んでいた。選ぶからには、彼（女）でなければいけない基準がある。それは「愛情」であるかもしれない。「家柄」や「資産」や「政略」かもしれない。とにかくそこには、選択が働く。けれどもいったん選択が働くと、その結果は固定したもの（義務）になって、簡単に解消（離婚）できなくなる。つまり夫婦が一緒にいるのは、選びあったからであり、同時に、それが義務だからだ。

それに対して親子は、互いに選択したわけではない。特に子供にしてみれば、生まれてみたら親がいた、という感じになる。そのため、親が子供と同居して面倒をみる義務は、絶対である。親がその義務を放棄するか、その能力を失うか、死亡した場合でないと、親以外の人間が親になり代わる（養子をとる）ことはできない。

夫婦、親子の関係で、社会のすべてのメンバーが家族のどれかに所属できればよいが、なかなかそうはいかない。そこで、それ以外の関係の人びとも、家族は抱え込む。どういう関係の人間をどの家族が収容すべきかは、文化によってだいたい決まっている。こうした関係（たとえば、妻の片親をひきとる場合など）も、やはり義務であろう。

ところで親子関係は、生物学的な関係そのものではなく、それが解釈されたもの、すなわち、観念的・社会的な関係（血のつながり）である。

血のつながりは、関係の遠い人びとにも拡大される。結婚を挟んで血のつながる人びと（姻族）も、義理の関係としてこれに加わる。こうして組みあがる人びとのネットワークが、親族である。親族は、どの範囲のメンバーが同じ地域に住むべきかというルールをそなえている場合がある。

話を親子関係に戻そう。血のつながりが社会的だということは、親子関係が「役割」だということである。「役割」は、学習しないと身につかない。親らしく行動するためには、努力が必要なのだ。夫婦も「役割」である。家族は「役割」の束である。言い換えればそれは、文化や規範といった、一緒に暮らすための技術の束である。

家族の文化や規範が弱まれば、人びとが一緒に暮

参考文献
●立花隆『サル学の現在』平凡社・一九九一
●橋爪大三郎『性愛論』岩波書店・一九九五
●落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房・一九八九

らす能力や必然性は低くなってしまう。

工業が発達するまで、家族は重要な生産の単位だった。農家でも、商家でも、家族労働が中心であった。家族を離れては、誰も生きていけなかった。けれども産業文明が発達すると、家族は生産から切り離され、単なる**消費**の単位となった。子育てや教育や余暇といった、どちらかと言えば周辺的な役割だけを期待されるようになった。それにともなって、都市勤労者の家庭を守る、**専業主婦**の一群が登場した。専業主婦は、夫に依存しないと生活できないので、おとなしく家族の一員として暮らしている。しかしそうするうちにも、家族の機能はどんどん空洞化していった。

産業社会が成熟すると、教育水準が高まる。学歴の低い男性よりも、高学歴の女性のほうが、労働力として価値がある（企業がよろこんで雇う）のは明らかだ。これを女性の側からみると、仕事が順調で給料もよいのに、下手に結婚して専業主婦になると貧乏になってしまう、ということになる。女性の社会的地位が高まったのに、家族の役割は女性に不利にできている。結婚しない**シングル・キャリアライフ**が、女性のひとつの選択肢となった。

これを男性の側から言えば、**結婚難**である。ここ一〇年間で、三〇歳台男性の独身率は、驚くほど上昇した。昔ながらの家族役割に頭がこり固まり、専業主婦のサーヴィスを期待するだけでは、おいそれと相手がみつからない。女性にとって、こんな男性と一緒に暮らすメリットがないからである。

「三高」などと、女性が男性を選り好みする。学歴も収入も高くない男性は、肩身が狭い。なぜなら男性の場合、シングルで生活していると、結婚する甲斐性がないからだという社会の否定的な評価を受けることになるからである。

大都市の土地や住宅が高いのも、結婚難に拍車をかけている。仕方がないので親と同居しようと、二世帯住宅がブームとなった。しかし、いざ暮らしてみると、親も子供夫婦も不満がいっぱい。結局出ていって、一階が空っぽという話もよく聞く。

アメリカでは友人や、見ず知らずの他人同士が共同で生活する、**新しい「家族」**が増えている。家族が「役割」の束であるという根本に立ち帰るなら、たしかに「血のつながり」にこだわる必要はない。一から「一緒に暮らす理由」を考え直さなければならない時代になった。

『キャリアガイダンス』　第29巻第1 号通巻315 号　1997. 1. 20. 発行 pp. 21　リクルート

《1997－42》

PLAZA

日本人はなぜ，英語が話せないのか

橋爪大三郎
社会学者

中学，高校と６年間も英語を学び，難しい入試問題をくぐり抜け，大学でもまだ英語と付き合った――はずなのに，日本人は英語が話せない。奇妙なことだが，それが当たり前になって，誰も不思議に思わない。

なぜ日本人は，英語が身につかないのか？　いろいろな説がある。日本語の語順が，英語と逆さまなせいではないか。外国人コンプレックスが強すぎるせいではないか。入試用の文法ばかり教えこまれたせいではないか。活きた英語に触れるチャンスが身近に少ないせいではないか……。どれももっともらしいが，本当かどうか怪しい。

なぜすらすらと，英語が自分の頭から出てこないのか，この際じっくり考えてみよう。

たまたま８年ほど前，中国語を習い始めた。英語で懲りたので，とにかく話せるようになりたいと会話学校に入った。先生は，日本に着いて間もないちゃきちゃきの北京っ子で，授業はぜんぶ中国語。教科書をみれば，漢字だからだいたい意味はわかるが，発音はまったくちんぷんかんぷん。テープを繰り返し聞き，巻き舌音や有気音／無気音を練習して数年経つうちに，どうにか言いたいことが口から出てくるようになった。

うまく行った理由。第一。日本語を間にはさまず，中国語でものを考え，反応するようにした。第二。文法の勉強をしなかった。第三。余計な試験がないので，言葉を話すこと自体を楽しめた。第四。漢字のおかげで，単語をいちから覚える必要がなかった。第五。同じアジアの言葉なので，背伸びをせず気楽に学べた。

英語もこのやり方でよいはずだ。特に，第一の原則――外国語だけで動く回路（どんなに小さくてもいいから）を頭のなかにとにかく作ってしまう――が，決定的に重要である。

外国語を話すのと，聞くのでは，話すほうがずっと簡単である。なんとなくその逆の気がするので，このことは強調しておく必要がある。話す場合は，自分の知っている単語を並べていけばよいし，ゆっくり話せる。聞く場合にはそうはいかない。そして，黙っているよりは，たとえ単語を並べるだけでも，何か話したほうがましなのだ。

そのうえで，相手の発言にふさわしい受け答えをしないと，会話が進行しない。今度は，聞く力である。でも心配することはない。あなたが何か話せば，話題の見当がつくし，あなたのレヴェルに合わせて，相手もゆっくり喋ってくれる。

こんな練習を繰り返せば，英語だって必ず話せるようになる。中高の６年間で十分だ。だがそれにはまず，教師が英語を喋ってくれないと困る。ＰＣソフトもよいが，いま出ているものはどうしても聞取りが中心だ。会話のやり取りを練習できない。どうしても英語で教える英語の授業が，週に１回は必要だ。そうすれば，どうしても英語に英語で反応せざるをえない。英語の話せない教師が国中の教壇で英語を教えている珍現象に，終止符を打ってほしい。

はしづめ・だいさぶろう
1948年神奈川生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大学教授。〈言語〉派社会学を首唱するいっぽう、社会批評を広く手がける。主な著書に『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』（勁草書房）、『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）、『はじめての構造主義』（講談社現代新書）など。

『レジャー産業資料』　第30巻第2号通巻365号 1997.2.1.発行　pp.72〜74　綜合ユニコム

メディア依存型ではない地域密着型の街づくりを

東京工業大学 教授（社会学）　橋爪大三郎

●都市もメディア依存型に

都市の空洞化が進んでいる。その最大の原因は地価の高騰にある。土地が値上がりしたために、それに見合ったビジネスしか成立しなくなり、都市機能が衰弱した。日本の都市は、この二〇年ほどの間にすっかり「メディア依存型」になったが、それは都市機能の衰弱と関連している。

メディア依存は、情報依存と換言してもよい。『アンアン』『ノンノ』が登場したころから、小金を貯めたOLたちが雑誌を片手に田舎を旅行するようになった。メディアによって旅行先の事前学習は済んでいる。もちろん、それまでも海外旅行に行くには事前学習は行なわれていた。大きな出費で、何度も出かけるわけにはいかないので、ガイドブックや解説書で必要な情報を仕入れたうえで、効率よく実際の旅行に行くのである。ところが、国内旅行でも似たようなことが当たり前になってきた。出身地がどこであろうと、具体的には田舎のことを何も知らない彼女たちは、田舎の風景をあたかも外国の風景のように消費する。レジャー系の雑誌で、旅行のコラムに人気が集まるのはこのためである。

田舎に出かける場合と同じ行動が都市でもはじまったが、それは地価が高騰した時期と一致しているのである。

バブル時代に都市を支えたメディアの典型に『Hanako』があるが、その特徴はエリアと結びついていることだった。どの横町を曲がるとどんなレストランがあるのか、また店内の様子や値段、味といった期待できる消費のメニューをあらかじめ教えてくれる。そうした事前学習のあと、友だちやボーイフレンドと現地に出かけるというパターンは、そこが彼女たちの日ごろの行動圏ではなく、たまにしか行かない代わりに高額な出費を伴うことを意味している。

現在の都市部に立地するレストランは、雑誌などで見て年に数回しか来ないという客層を中心に成り立っている。裏を返せば、そうした店はメディアに依存し、〝なじみ〟の顧客だけでは維持できなくなっているのである。そのため、雑誌に取り上げられてしばらくの間は満員になるが、何年かすると倒産したり、リニューアルせざるをえない状況に追い込まれる。このようにメディアを仕掛けないと街が成り立たないのは、それだけ都市機能が薄弱になった証拠であるといえよう。

●地域密着型の都市づくり

メディア依存型の都市と対照的なのが、「地域密着型」の都市である。たとえば、移民受入れ政策をとっているオーストラリアのシドニーなどはその典型であろう。アジア系を中心に、それこそ世界各国の人々がそれぞれの国ごとにコミュニティをつくって生活しており、そこでは世界中の食べ物がオリジナルのレシピで調理され、しかも安価に提供されている。料理するのも食べるのもその地域に住む人たちであり、日常的にさまざまな食文化の交流が行なわれているのである。

対して東京のレストランは、ローカルなフランス人のコミュニティに支えられていないため、フランス料理もフランス風日本料理にすぎなくなってしまう。日本の食文化は、それだけ危うい立脚点のうえに乗っているのだ。

ただし最近、東京・大久保周辺にイラン人街や韓国人街・中国人街などが形成されつつあり、教会やモスクなどを核に人々が集まり、バザールなどが開かれるようになった。こういう傾向が発展していけば、地域密着型の街が成立する可能性はあるかもしれないが……。

食文化だけでなく、芸術についても同様のことがいえる。たとえばロンドンには、芸術家ばかりが集まるエリアがあり、才能はあるがお金のないアーチストが世界中から集まってきて生活している。その都市の魅力に引かれて住みつき、その街でデビューしようと頑張って才能を開花させるのである。また、そうした人たちを地域が支えてチャンスを与える。これが文化的な都市の役割である。ニューヨークのグリニッジ・ビレッジやソーホーにしても、世界の大都市には必ずこうしたエリアがあるものだが、残念ながら東京にはない。

●地元の住人がコンスタントに訪れる施設開発を

東京で文化が育たず、芸術に集客力がない原因の一つは、産業・文化の担い手である大人たちから、文化を支えるために必要な時間とお金が奪われているからである。通勤に時間がかかり、会社は定時に終わらない。主婦の夕方は子どもの世話に追われて、とてもオペラ観賞に出かける余裕はない。

したがって都市の文化は、時間とお金のあるOL、子ども（中高生）に擦り寄っていかざるをえないのである。しかし彼らは、面白ければいいし、おいしければいいという刹那主義であるうえに社会経験がないので、何がよいかを自分で判断することができず、メディアに依存することになる。

このままでは都市の文化は育たず、地域の発展もない。こうした状況を変えるためには、メディアに依存しない作戦を立てる必要がある。つまり、地元の住人がコンスタントに月に五回、一〇回と出かける施設を重視することである。五〇〇人収容できる施設をつくって都市全域から人を集める発想ではなく、二〇〇人でもいいからコンスタントにお客が入るような、その街のカラーになじんだ場所をつくるほうが息の長い効果を生み出すことができる。

いま最も大事なのは、地域に根づくことである。都市エリアの住人たちや外国人も含めた〝地つき〟の人々を相手にして、地域に密着した開発を考える必要があるのではないか。

現在、都市が寂れているといわれるが、これはけっして悪いことではない。その結果として地価が下落すれば、より収益率の低い施設でも立地できるチャンスが生まれ、これまで実現できなかったアイデアを活かすことができるかもしれないからである。

●〝オン・デマンド〟の考え方が重要

ところで、都市で具体的なアイデアを活かすうえで重要なことは、〝オン・デマンド〟の考え方だ。オン・デマンドとは、「誰でも、どんなときにでも、ほしいと思うものがすぐに手に入る」ことを意味する。その典型がコンビニエンスストアであり、通信で結ばれたカラオケボックスである。

このオン・デマンドの考え方で、たとえばサテライトスタジオを街角につくってみると面白いのではないだろうか。誰でもいつでも歌えるカラオケスタジオのようなものをつくり、そこでテレビ番組を制作する。どの場面が放映されるか客にはわからないが、とにかく随時オンエアの最中であるかのようなシステムにしてしまう。こうすると客は張り切るし、集客という点でも競争力は十分にあると思う。

施設をつくって人を呼ぼうとする場合に重要なのは、施設の中身が人々にどんな形で露出され、認知されるかということである。劇場でも映画館でも、中で何をやっているかを通りがかりの人たちにも見せたほうがいい。レストランも同様だ。施設内の様子が見えることによって、街は活気づく。つまり、個々の施設と街がつながっているという感覚が大事なのである。

人々が「自分たちのものである」と確認できる街。お互いの顔の見える街。そんな街づくりが待たれているのではないだろうか。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞　おまけ

制度の生成3

橋爪大三郎
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

『FAMILY』 第239号 pp. BOC出版部1997.4.20発行

随想

情報化時代の情報リテラシー

橋爪大三郎

人間は、言葉を使って生きていくことを運命づけられている。その意味で、人間と情報は切っても切れない関係にある。

人間が見聞きするもの、すべては情報だと言える。特に、ほかの人間を通して知りえた知識が、大きな比率を占めることで、人間の知能と文明がかたちづくられた。これを加速するのがコンピュータである。コンピュータの発明により、情報が機械処理できるようになった。このことが人類社会に及ぼす影響は、巨大なものがある。「情報リテラシー」は今や「コンピュータ・リテラシー」とほとんど同義になったと言える。

リテラシーとは本来、「読み書きができる」という意味。古代、中世、近代、いずれの社会も、文字が読める人・読めない人の落差、すなわち、リテラシー・ギャップを当然の前提にして組み立てられてきた。

現代の情報化社会は、字の読めない人こそほとんどなくなったものの、コンピュータが使える、使えないという、新たなリテラシー・ギャップを生み出している。これが、人びとを疎外する恐れはないのか。

二十世紀半ばにコンピュータが発明されたことを受け、わが国は八〇年代にワープロが普及、九〇年代に入ってパソコンブームが起こった。特にここ数年、パソコンをネットワークに接続して使う、本格的なインターネット時代が到来している。それでも、ユーザにとっては、キーボード、カタカナのジャルゴン、インターネットの英語という三つの大きな壁があり、まだまだ敷居が高いのが実状であろう。敷居とは、裏を返せばリテラシーであり、それを乗り越えてはじめて、広いネットワーク世界のメリットを享受することができる、という仕掛けになっている。しかしそもそも、そんな敷居は必要なのか。

パソコンがもっと身近な存在になってほしいというユーザの願いを受けて、機械は日進月歩でバージョンアップしていく。作る側からいえば、同じものを作るというのは進歩を止めてしまうこと。より安く、より機能の高い新製品がぞくぞく発売されるが、ユーザにとっては、前に習ったことが無駄になり、また一から覚え直し、という結果になる。

しかし当面はこれもやむをえまい。機械のほうは、少しずつだが、人間のほうに歩みよって来てくれている。まだまだ機械と人間のギャップは大きいが悲観すまい。もはや機械なしには日常生活が成り立たないという次元にまで、機械が日常生活に織り込まれてきている。そのうち、わざわざ技術を身につけるという感覚なしに、日常生活を過ごしていたら自然にパソコンも使いこなしていたという日が訪れるだろう。子どもがファミコンで遊んでいて、気がついたらパソコンを操っていた、という具合にいくなら理想的だ。情報リテラシーの理想（ないし、極限形）は、リテラシー不用にほかならない。そこにコンピュータがあると意識されないこと、これが理想の状態である。パソコンと日常生活が一体化し、消費も生産も一体化していくという世界が、いま始まっている。

では昨今、コンピュータ・リテラシーがなぜこうも話題となるのだろうか。

コンピュータの機能は、どこまで使っても、まだまだ使われていない部分のほうが多いと思われるぐらい終わりがない。自動車なら、何の役に立つのか、大変に明確である。けれどもコンピュータは、何の役に立つ機械かが、いつまで経ってもはっきりしない。まだ使いこなせていないのでは、という感覚を人間に与え続ける。たとえば電子メールも、この間まではパソコンの機能と考えられていなかった。いまではスイッチを入れたら、真っ先にメールを読むという人が大部分だ。

何をさせたらいいのか。何を言ったらいいのか。いつも考えていなければならないような機械なんて、初めてではないだろうか。

コンピュータは、中国語で「電脳」という。ものを「考える」機械、どこか人間と相似の存在と、とらえられてきたのではないか。人間のようにものを考えてくれる、と思うのは錯覚だ。スイッチを入れただけでは何もしてくれないと焦るが、このギャップはもしかしたら自分の責任なのではなかろうか。コンピュータに高級なイメージ、ものを考える機械という幻想を与えてしまったわれわれが、そのとおりでないと焦りを感じてしまう。自分が間違っているのではないかと自分を責める。こういう心理がはたらくと、リテラシーの欠如が耐えがたい重荷になってくる。

そんなことを気に病むのはやめよう。情報化社会は、人間ではなしに、コンピュータがリテラシーを持たなければならない時代なのだ。コンピュータが、自分が限定的な知能しか持っていないことに気がつく。そして、リテラシーを身につけて、自分がなにをやれるのか、われわれにわかる言葉で発信してくれる。比喩的な言い方だが、コンピュータのコンピュータ・リテラシーを高めることが、二十一世紀の課題となる。

コンピュータはますます小型化し、単機能なもの、より日常生活に密着したものになっていく。キーボード、ディスプレイも、そのうちなくなると考えられる。音声入力が可能になれば、たまごっち感覚で身につけられるし、価格もたまごっち並みになれば、爆発的に普及するであろう。

例をあげれば、「インテリジェント・トイレ」みたいに、トイレで毎日の健康状態を判定してくれるコンピュータ。コンピュータから反応が返ってくるのを待てばよいから、人間の側にリテラシーは必要なくなる。

このように、人間と一体となって行動してくれるもの、機能がはっきりしているものほど、コンピュータにとって自分のリテラシーを高めやすい。医療介護、住居、食事。衣食住に密接に関わるものが有望であると思う。また電子メールの普及により、コンピュータの特性に適合して人間関係が再組織され、新たなマナーが必要になってくる。手紙の書き方。会議の進め方。意思決定のあり方。企業から「管理職」という概念が、なくなってしまうかもしれない。

ネットワーク社会は、タテ割り社会から双方向社会への移行でもある。今まで一部の人が、重役である、専門家である、という理由で一人占めにしていた情報が、どんどん人びとの間に広がっていく。そうすると、組織はフラットになっていく。企業の内側／外側、国家の内側／外側、そういう垣根を越えて、情報が瞬時に伝わっていく時代の幕が開けた。情報がより大量に、素早く、安く伝わるという基盤ができてきた。

今しなければならないこと。それは、コンピュータ社会の利点を、とことん引き出すことである。すでにこれに着手した国もある。日本は、政治改革もはかどらず、行革もこれからだ。企業改革。金融改革。税制も改革が急がれている。同じコンピュータを導入しても、ヒューマン・ファクターで滞っている改革が多すぎる。もっと根本的な改革の可能性を探り、より生きやすい社会を展望する。それが実行可能とわかったら、勇気を持って推進する。これが二十一世紀を生き延びる道であろう。

橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう）氏
社会学者。社会病理を社会工学的手法で解析、その明快でユニークな論法は、学界でもマスメディアでも、高い評価を受けている。
東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。東京工業大学助教授を経て、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。理論社会学専攻。
著書は『橋爪大三郎コレクション』（全三巻）『言語ゲームと社会理論』など多数。

『大学ランキング'98』 pp.146～150 朝日新聞社1997.5.1発行

週刊朝日編

学問的な意味で、
ひと息つける場がほしい

21

資格、採用試験ランキング

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授
橋爪大三郎

資格、採用試験には大事な機能があります。専門職や特定の技能の、期待できる水準を定める。だれもが信頼して資格のある専門家に任せることができるように。医師の看板を出していれば、最低限の治療は受けられるし、床屋さんならば耳を切られることはないだろう、といった信頼です。

では、大学と資格はどのような関係にあるのでしょうか。ある職種は、大学を卒業すると資格が与えられます。神学がそうです。また、医学も大学での専門教育が前提になっているので、国家試験はありますが、ややそれに近い。アメリカでは、ロースクールがそうです。卒業すれば、法律家としての資格があるとみなされます。

では、日本の大学の法学部はどうでしょうか。資格、採用試験の受験で主役になる法学部について考えてみます。

本来、法学部というのは、法律の専門技術を伝授する学部です。その専門家を育ててしかるべきで、卒業生は弁護士、司法書士、税理士など法曹関係に進出する。これが法学教育のあるべき姿です。

ところが、そもそも、東大法学部はこのような役割を持っていませんでした。法律家ではなしに、官僚をつくるために生まれたのです。法律の解釈を統一するためには、どうしても政府主導で、法律家を養成しなければならない。それを法学部が担うという考え方があったのです。一方で、裁判官や弁護士などは司法試験で採用する。こういう二元的な体制になっていました。

官僚の人数は限られ、しかも、そのほとんどは東大出身者で占められます。ほかの大学にすれば、法律にかかわる仕事として、司法試験をパスして法律家になるか、あるいは地方公務員になるかということになります。とくに司法試験は、だれにでもチャレンジでき、受験者の人数制限もないので、注目度は高いものがあります。

そうすると、合格者がたくさんいる大学にいけば、勉強がすすむのではないか。そういう需要が生まれてきます。司法試験に役に立つ大学へ行こうと、だれだって考えます。司法試験に強い中央大法学部の人気が高かったのは、そのためです。

ところが、人気は長続きしませんでした。

資格・採用試験合格者

国家公務員Ⅰ種

	大学	人
1	東京大	437
2	京都大	221
3	早稲田大	89
4	名古屋大	81
5	東京工業大	73
6	東北大	60
7	北海道大	54
8	慶応義塾大	53
9	大阪大	44
	九州大	44
11	東京理科大	40
12	筑波大	31
13	一橋大	29
14	神戸大	24
15	東京農工大	22
16	中央大	18
17	広島大	16
18	明治大	13
19	横浜国立大	12

国家公務員Ⅰ種(85～96年)

	大学	人
1	東京大	6,016
2	京都大	2,537
3	早稲田大	1,153
4	東京工業大	1,034
5	東北大	1,003
6	北海道大	984
7	名古屋大	716
8	九州大	678
9	大阪大	625
10	慶応義塾大	563
11	東京理科大	555

司法試験

	大学	人
1	東京大	181
2	早稲田大	108
3	京都大	86
4	慶応義塾大	71
5	中央大	57
6	一橋大	34
7	大阪大	20
8	九州大	16
	上智大	16
10	明治大	15
11	名古屋大	13
12	同志社大	10
	東北大	10
14	立命館大	9
	関西大	9
16	神戸大	8
17	北海道大	7
	大阪市立大	7
19	創価大	6
20	日本大	5
	法政大	5
22	学習院大	4
23	立教大	3
	東京都立大	3
	国際基督教大	3
26	岡山大	2
	横浜国立大	2
	東京工業大	2
	千葉大	2
	関西学院大	2
	駿河台大	2

外務公務員Ⅰ種

	大学	人
1	東京大	16
2	慶応義塾大	4
3	京都大	3
4	東京外国語大	1
	一橋大	1
	上智大	1

外務公務員Ⅰ種(47～96年)

	大学	人
1	東京大	1,374
2	京都大	246
3	一橋大	208
4	慶応義塾大	118
5	早稲田大	74
	東京外国語大	74

司法試験(49～96年)

	大学	人
1	中央大	4,514
2	東京大	4,386
3	早稲田大	2,541
4	京都大	1,873
5	慶応義塾大	886
6	明治大	811
7	一橋大	515
8	東北大	464
9	大阪大	377
10	九州大	361
11	日本大	328
12	関西大	325
13	名古屋大	204
14	大阪市立大	103

中央大にはいい先生も、そうでない先生もいる。そんな玉石混淆の授業を受けるより、自分で授業を完全に選べる司法試験予備校へ行った方が効率がいい。中央大法学部のブランドが色あせていきました。

予備校で良い成績をとって、司法試験に楽々パスするような人は、受験秀才といっていいでしょう。偏差値と法学部の司法試験の成績は、ある程度連動する傾向があるので、偏差値を高めようとする法学部は、予備校の真似をするわけです。わが法学部は予備校とそっくりに作るので、ぜひきてください。そんな大学まで出てきました。

たいへん奇妙です。試験にパスすることと法律家として有能であることとは、無関係とは言いませんが、別のことで、試験にパスしたけれども、弁護士として、法律の運用、解釈ができない、いや、それ以前に、基本的な教養や一般常識に欠ける、どうしようもない人もいます。そのあたりは、大学で教養や一般教育をどうすべきかという問題にもかかわってきます。ここで、大学教育のあり方を考えてみます。

1 私が合宿授業を取り入れる理由

戦前の高等教育制度でよかったのは、一般教育と専門教育がきちっと分かれて、うまくかみ合っていたことです。旧制高校3年間は全寮制で、文系理系の人間がごっちゃになり、朝から晩まで一緒にすごし、知識とは何か、哲学とは何か、生きるとは何かなどを真剣に考えました。それから専門に進むわけですが、この3年間が、教養、一般教育の役割を果たしていたといえます。

戦後、このシステムが解体され、大学4年間で一般教育と専門教育を詰め込むことになりました。ところが、最初の2年間の一般教育は、中身が高校とそう変わりなくて退屈だ、専門教育は2年間では短すぎて中途半端だという批判が強まり、大学教育のあり方が問われるようになりました。

大学設置基準の大綱化、大学改革です。

大学改革の一つの柱は、一般教育と専門教育は折り合いが悪いので、まぜこぜにしようというものです。とくに専門教育側からは、これを機会に一般教育をつぶそうという動きがありますが、そうなると、ますます基礎的な一般知識、教養をもたない専門家ができてしまいます。

では、どうしたらいいか。文系理系を融合させたカリキュラムのなかで、コア部分は強制的に学ばせるけど、あとは、本人の選択で専門科目をとらせる。そこで卒業したければすればいいし、専門をより追究したければ、大学院に進めばいい。そういう、学問的な意味で一息つけるような場となれば、大学はよみがえると思います。

それから、キャンパス内に寮を作る。旧制高校的な人間関係を深めるためです。現状ではサークルがそれにあたりますが、ここでのつきあいは希薄なもので、深いつきあいが少なく、フラストレーションがたまるばかりのようです。

そこでオウム真理教に走るわけです。オウムは合宿をとおして、全人格的変革が期待できる。オウムはとんでもないけれども、ああいう形で自分を巻き込んでほしい、と期待する若者はたくさんいます。

私自身、そういう需要を感じているから、合宿や旅行といった参加型の授業に、ある程度、力をいれています。ただ、下手な人がやるとマインドコントロールになってしまい、よくない場合もある。それは、まずいですが、そういう場を提供することも、大学人の義務であると思います。

(構成、編集部　小林哲夫)

資格・採用試験合格率

外務省専門職員

	大学	人
1	慶応義塾大	8
2	上智大	6
	早稲田大	6
4	東北大	3
	筑波大	3
	千葉大	3
	東京外国語大	3
	青山学院大	3

公認会計士

	大学	人
1	慶応義塾大	115
2	早稲田大	95
3	中央大	39
4	一橋大	38
5	明治大	33
6	京都大	26
7	関西学院大	24
8	東京大	23
9	横浜国立大	22
10	神戸大	21

国家公務員II種

	大学	人
1	日本大	236
2	早稲田大	228
3	中央大	214
4	明治大	168
5	立命館大	148
6	同志社大	144
7	東北大	132
8	法政大	131
9	広島大	115

教員就職率(期限付き採用含む)

	大学	%
1	北海道教育大	66.1
2	福島大	60.9
3	上越教育大	57.9
4	信州大	57.8
5	愛知教育大	57.3
6	高知大	56.6
7	弘前大	56.2
8	島根大	54.9
9	鹿児島大	52.9
10	福井大	52.6
11	和歌山大	51.6
12	岐阜大	50.5
13	秋田大	50.2
14	大分大	48.0
15	岩手大	46.3
16	宇都宮大	46.2
17	鳥取大	45.2
18	大阪教育大	44.6
19	新潟大	44.3
20	長崎大	44.1
21	茨城大	43.8
22	三重大	43.5
23	山形大	42.7
24	群馬大	42.5
25	鳴門教育大	41.7
26	兵庫教育大	41.5
27	山口大	41.0
28	東京学芸大	40.9
29	熊本大	40.6
30	広島大	40.2
31	岡山大	39.7
32	埼玉大	38.5
33	福岡教育大	38.1
34	静岡大	37.9
35	琉球大	37.3

教員就職率は国立大学教員養成系学部のみ

薬剤師

	大学	%
1	摂南大	95.9
2	共立薬科大	89.2
3	神戸学院大	88.4
4	武庫川女子大	88.2
5	北里大	87.5
6	福山大	87.4
7	徳島文理大	86.7
8	神戸薬科大	84.9
9	東京理科大	84.8
10	東京薬科大	84.7
11	北海道大	84.6
12	大阪薬科大	82.9
13	京都薬科大	82.0
14	昭和大	79.8
15	新潟薬科大	79.2
16	東邦大	78.6
17	日本大	78.4
18	明治薬科大	78.0
19	帝京大	77.1
20	昭和薬科大	76.5
21	北海道薬科大	76.2
22	静岡県立大	75.9
23	富山医科薬科大	75.1
24	近畿大	75.0
25	星薬科大	74.4
26	名城大	74.1
27	城西大	73.0
28	北陸大	72.9
29	福岡大	72.8
30	長崎大	72.5
31	京都大	71.8
	広島大	71.8
33	岡山大	71.3
34	東北大	71.0

ranking

資格・採用試験合格率

医師

	大学	%
1	筑波大	100.0
2	自治医科大	98.1
3	群馬大	97.9
4	京都府立医科大	97.2
5	札幌医科大	97.1
	慶応義塾大	97.1
7	昭和大	97.0
8	東京慈恵会医科大	96.6
9	名古屋大	96.5
10	新潟大	96.4
	名古屋市立大	96.4
12	日本大	96.3
13	三重大	96.2
	産業医科大	96.2
15	大阪大	96.0
	広島大	96.0
17	高知医科大	95.6
18	琉球大	95.5
19	山梨医科大	95.3
20	北海道大	94.6
	福島県立医科大	94.6
22	大阪市立大	94.4
23	大分医科大	94.1
24	信州大	93.8
25	横浜市立大	93.7
26	神戸大	93.6
27	弘前大	93.3
28	浜松医科大	93.2
29	九州大	92.9
30	関西医科大	92.7
31	千葉大	92.4
32	順天堂大	92.3
33	佐賀医科大	92.1
34	川崎医科大	91.8
35	北里大	91.4
36	鳥取大	91.1
37	宮崎医科大	91.0
38	愛媛大	90.9
39	滋賀医科大	90.6
40	岡山大	90.5
	和歌山県立医科大	90.5
	東京女子医科大	90.5
	兵庫医科大	90.5
44	東京大	90.3
45	徳島大	90.1
46	長崎大	90.0
47	福井医科大	89.9
48	山口大	89.5
49	金沢大	89.4
	奈良県立医科大	89.4
51	東京医科歯科大	89.3
52	旭川医科大	89.2
53	岐阜大	89.0
54	東京医科大	88.8
55	防衛医科大学校	88.7
56	香川医科大	88.5
57	富山医科薬科大	88.4
58	藤田保健衛生大	88.2
59	熊本大	87.9
60	岩手医科大	87.5
61	東北大	87.3
62	鹿児島大	87.1
63	東邦大	87.0
64	京都大	86.8
	杏林大	86.8
66	大阪医科大	86.7
67	山形大	86.0
	日本医科大	86.0
69	秋田大	85.6
	島根医科大	85.6

歯科医師

	大学	%
1	東北大	100.0
2	北海道大	98.4
3	広島大	98.2
4	新潟大	98.0
5	大阪大	97.3
6	日本歯科大・新潟歯	97.1
7	九州大	96.9
8	鹿児島大	96.8
	徳島大	96.8
10	岡山大	96.4
11	九州歯科大	96.2
12	北海道医療大	95.9
13	東京医科歯科大	95.3
14	日本大・歯	93.2
15	東京歯科大	92.4
16	日本大・松戸歯	91.9
	日本歯科大・歯	91.9
18	長崎大	91.8
19	朝日大	89.8
20	愛知学院大	87.9
	岩手医科大	87.9
22	奥羽大	85.3
23	福岡歯科大	85.2
24	大阪歯科大	84.1
25	明海大	83.7
26	鶴見大	83.0
27	神奈川歯科大	82.4
28	昭和大	81.0
	松本歯科大	81.0

朝日新聞
1997年(平成9年)11月4日 火曜日

「フリマ大好き」最近事情

家庭の不用品や古着、手作り品を並べた「フリーマーケット」。通称「フリマ」。ほぼ毎週末には岡山、倉敷両市のどこかで、大小の「フリマ」が開かれている。値段の安さだけでなく、「値引き」をめぐる買い手と売り手の会話や、新たな出会いも楽しみのひとつ。人々が自分の感覚でものを選び、中古品に対する抵抗が少なくなったことも、人気の背景にあるようだ。「フリマ大好き」という人たちに、フリマの魅力と最近のフリマ事情を聴いた。

（前原 聡子）

お買い得、付加価値もある

橋爪大三郎・東京工大教授（社会学）の話　バブル期に買い求め、バブル崩壊後に手元に残った商品が、フリーマーケットという中古市場に吐き出されている。ごみとして捨てるよりはましだし、人のものだったことを気にしなければ、驚くほどお買い得だ。ひと時代前の品物には、ノスタルジーをかき立てるという付加価値もある。人々の意識も変化して、ブランドにこだわる時代は終わり、自分の好みに合えば何でもよくなってきたのだろう。

『放送文化』 第35号 pp.67～68日本放送出版協会1997.5.1発行

復活を許さないメディアの仕組み

島田問題をジャーナリズムの報道被害と言い切るのは東京工業大学の橋爪大三郎教授である。

「法律問題に絞っても、報道機関、ジャーナリズム、コメンテーターを含め、言論に携わる職務にある人達が事実の裏付けを取らぬまま、ある言論人の言動について著しく偏った判断（オウムの手先という決めつけ）をもとにコメントを繰り返した。その結果、彼がバッシングの対象になってしまう。本人がどう申しひらきをしても、反省の色がなくけしからんと抗議が殺到して、職も辞めざるをえなくなった。

ここでは島田氏が報道被害者でジャーナリズムが加害者なのは間違いない。許しがたい不法行為です。けれどもオウム報道の渦中では、オウムが加害者で一般民衆が被害者、『オウムはこんなにひどい』と報道しているジャーナリズムは被害者の味方という構図だった。そうなると、加害者の一味と信じられた島田氏もバッシングされて当然と皆が思ってしまうので、加害者と被害者の関係が完全に逆転してみえるわけです。ではジャーナリズムにその自覚があったのだろうか。誤報はゼロにはできないので、ジャーナリズムとしては、万一誤報を行った場合は、キチンとそのことを謝罪し、経緯を説明し、名誉回復の措置を講ずる。それが信頼を取り戻す唯一の道なわけです。ところが、島田氏の場合、疑惑の裏付けを取ったかどうかということ以前に、誰が考えてもありっこない誤報を尾ひれをつけて流してしまった」

橋爪氏はこれに続けて、島田バッシングで問題となっている3点についても次のように反論する（要約）。

①ホーリーネーム　まったくの誤報だが、百歩譲って島田氏が知らないうちにオウムが勝手にホーリーネームを与えていたとしても、島田氏に責任はない。さもなければオウムは陥れたい言論人に次々とホーリーネームを勝手に贈り、社会から抹殺できてしまうことになる。

②教え子疑惑　結論から言えば教え子がオウムに入信しても彼がそれを勧めたわけでも何でもなく、責任の生じようがない。

『ビッグトゥデイ』（フジテレビ系）に出演して疑惑に答える島田氏

成人した大学生には信仰の自由があり、ある教団に入信するのも本人の自由。教員は怪しげな教団だと思えば注意することが望ましいが、法律上の義務ではない。

③第7サティアン見学　オウムに利用されただけ。オウムは島田氏のような宗教学者に見学してもらって、宗教施設と言ってもらいたかった。オウムの立場に立てば、世間の人々が島田氏をオウムの手先と考えていたのでは困る。つまりこの件は、島田氏がオウムの手先でないという証拠になる。騙されたから悪いというが、それなら、騙された学者、ジャーナリスト、一般人がどれだけいることか。でも大衆心理としては誰か悪者がいないといけない。そこで祭り上げられたスケープゴートが島田氏なのだ。

バッシング当事者をかわすテレビ

法的問題の有無を離れた場合、争点になると思われるのは新興宗教にフィールドワークとして学生を行かせている点。取りようによっては入信の機会を作っていることになる。実は島田氏自身も学生時代、担当教授がアメリカのベラー（社会学者で新興宗教の潜り込み調査を行っていた）と仲が良かった関係で、島田氏が大学で実践したものとは比較できないほどの本格的な潜入調査を、それは宗教団体とはいえないが、かつての山岸会で経験している。調査手法については議論の余地があろう。

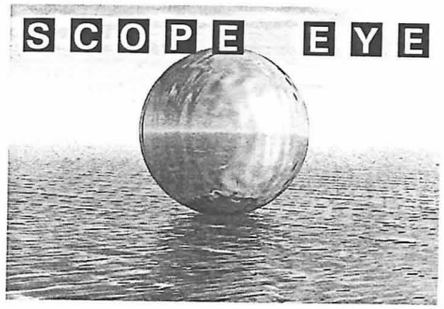
それにしても、問題はテレビである。新聞記事をもとに裏を取らずに間違った報道をする。加害者の嫌疑がかけられているにもかかわらず、放送法を盾にビデオテープを出さない。一方、自らは自己検証番組を作って弁明する。報道被害にあった人間の名誉回復の余地はないと来ている。加えて、「ワイドショーの作り手の問題がある。オウムをやれば数字が取れるという狙いで企画していたからね。伊藤さんや有田さんが島田批判をやりたいから番組を作ってくれと言ったわけじゃない」（二木啓孝氏）

島田バッシング問題で当事者として矢面に立っていないのはテレビだけである。

放送界は瀕死、クスリはあるか!?
田原総一朗の闘うテレビ論
田原総一朗
TBSのオウム・ビデオ問題、日テレ猿岩石の途中パス無銭旅行……
テレビのもつ可能性と問題点を鋭くえぐる、インサイドストーリー
●本体価格1553円(税別)
文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23

『企業会計』第47号　pp.2～3中央経済社　1997.7.1発行

SCOPE EYE ■スコープアイ



ベンチャー企業を「金の成る木」に

橋爪大三郎 ■東京工業大学教授

日本のビル・ゲイツ，いでよ！　相も変わらず，ベンチャー企業育成のかけ声が高い。どんな地方都市の振興計画を見ても，ベンチャー企業育成やハイテク産業団地の青写真が載っている。すぐにもシリコン・バレーが出現するかのような計画を，自治体に売り込んで回る無責任なシンクタンクも後をたたない。しかし，さまざまな育成策は，ことごとく失敗してきた。

どうしてだろうか？　私に言わせれば，それは，ベンチャー企業の本質を理解していないからである。

ベンチャー企業とは何か。それは，新技術を核に，まったく新しい市場を開拓し，急速に拡大していく企業のことである。ベンチャー企業として成功することを目指す，小さな企業の参入はひきも切らない。その大部分は，激烈な競争の果てに淘汰されてしまい，ごくごく一部だけが生き残っていくのだ。

これは，生態学でいうニッチ（棲分け）の変更と似ている。たとえば大昔，生き物は水と離れて生きていけなかったから，乾燥した陸地はがら空きだった。そこへ肺呼吸ができ，殻に包まれた卵を産む爬虫類が進出する。乾燥に強い新技術をそなえた，ベンチャー生物である。そういう生物がつぎつぎ陸地に這いあがり，弱肉強食の生存競争を繰り広げた。そして生き残った恐竜が，陸の王者として繁栄を謳歌した。

数多くのベンチャー企業がひしめくなか，どの企業が生き残るかは，結果論でしかない。事前にそれを予測するのは不可能である。しかし生き残った場合，その企業が獲得する市場と利益は莫大である。ベンチャー企業は，投資先として，ハイリスク・ハイリターン（大博打）なのである。

ベンチャー企業の側から言えば，競争を生き残るために，資本が必要である。なるべく多額の投資を集めたい。投資する側から言えば，リスクを分散するため，複数の企業に分散投資したいし，そのうちどれかがつまずけば，すぐにも切り捨てて資金を回収したい。大部分のベンチャー企業は潰れる運命にあり，それ以上「育成」する必要などないのだ。

となれば，ベンチャー企業の育成とは，競争のための適切な環境を用意すること。特に，競争力のある企業に雪だるま式に資金が集中する仕組みを用意すること，につきるだろう。もちろん，そういう自然なプロセスを，どこかの大企業が邪魔だてしたり，官庁が余計な口出しをしたりしないことも大切だ。

そこで大事になるのが，投資家の自己責任の原則をはっきりさせること。そのうえで，投資家に大きな収益を保証すること，である。

私財を投じてベンチャー企業を起こし，成功させた。そういうオーナー創業者が，巨額の利益をおさめるのは，当然の報酬であるし，社会正義にもかなったことである。そういう企業にいち早く，リスクを冒して投資し，成功を助けた投資家も，（オーナー創業者ほどではないにせよ）大きな収益をおさめて当然である。そのため必要なら，配当や株式売買益に対する特別減税措置を講ずる。少し遅れて駆けつけ，この企業は成功しそうだとわかった段階で投資した投資家も，そこそこの収益をおさめる。こういうふうに，早い者勝ちの投資のルールを用意することが，ポイントだ。ベンチャー企業を「金の成る木」にしなければならない。

よちよち歩きのベンチャー企業は，資金力がない。企業資産もない。あるのはベンチャー精神と，技術力（アイデア）だけだ。この企業の将来性を，証券（株券）にする。その額面は最初，出資した金額に応じたものだろう。しかしその将来性が市場で評価されるにつれ，時価は額面の何十倍，何百倍，時には何万倍にも膨れあがっていく。上場前の株式を店頭で公開し，手軽に売買する仕組み，そして，そうした株式を売買した場合の利益を減税する仕組みが必要であり，それで十分なのだ。

ビル・ゲイツ氏は，アメリカ長者番付のトップを飾っているが，それは氏が，マイクロ・ソフト社の株式を大量に保有しているからだ。氏とともに創業に加わった社員たちも，自社株を保有することで，大きな資産を手にした。早期に同社に投資し，株式を取得した人びとも同様である。このメカニズムは一見，天下一家の会やKKCなどのネズミ講に似ているけれども，きちんとした経営実態があり，その収益を株主に配当している点が根本的に異なっている。

ベンチャー企業への投資は，億万長者への早道だ。皆がそう思うようになれば，企業の将来性に関する情報が大きな商品価値をもつようになる。ベンチャー企業の情報がこうして人びとのあいだに行き渡れば，競争はますます熾烈をきわめ，ビッグ・カンパニーにのし上がるまでの期間もぐんと短縮される。マイクロ・ソフト社のようなサクセス・ストーリーがいくつも生まれるだろう。

最大の利潤を求めて，投資を行なう。資本主義はこうでなくてはならない。ベンチャー企業を育成する場合も同じである。

この点，持株会社が公認されたのは，よい傾向だ。

戦後の企業は，不採算部門を切り捨てて，利益の見込める部門に投資を集中するのが苦手だった。余剰人員を社内で再配置したり，少しずつ事業部門を縮小したりするのがせいぜい。配当を削って，雇用を増やしたりボーナスを弾んだりしても，文句を言ってどなり込む資本家はいなかった。

持株会社は，関連会社の株式を一手に保有して，投資と収益のバランスを管理するのが仕事である。当然，資本主義のロジックにいっそうシビアになる。

これが，ひとつの企業をいくつもの事業部に分ける「事業部制」に比べていい点は，まず第1に，各事業部門が別会社として独立しているので，社員の給与や待遇に差をつけやすい。いよいよだめとなれば，倒産→解雇もできる。いっぽう，急成長する会社には集中的に投資。会社を売ったり買ったりするのも，やりやすくなる。資本と経営の分離を，持株会社／関連会社の会社間の関係として実現するわけである。こうして，資本と経営の合理性が貫徹できる。

大企業がこうした機動性を身につければ，ベンチャー企業に投資したり，買収したりするのもやりやすくなる。自前で新規事業に乗り出したりしなくても，成功した企業を買収すればよい。買い手が増えれば，株価が上がるから，ベンチャー企業にとっても歓迎すべきことだ。

ベンチャー企業が「金の成る木」になるかどうか。日本資本主義の復活が，ここにかかっている。

『教育をどうする』岩波書店編集部編　pp.109～110　岩波書店　1997.10.20発行

落第が教育を救う

橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう
社会学者
東京工業大学教授
一九四八年生まれ

週刊誌が毎年のように、東京大学合格者の名簿を掲載する。東大に卒業生を送りこんだ有名高校のランキングも発表される。受験シーズンの最後をかざるお祭りである。これを誰も不思議に思わない。

一部の有名校が、東大合格者を量産するのがけしからん、と言いたいのではない。合格者の名前や学校ランキングを発表すると、受験が過熱するからいかん、と言いたいのでもない。そんなことは、気にしなくていい。東大に入学した時点で、目標が達成されたと考える。ここがおかしいのである。

なぜ、東大に合格したら喜ぶかというと、卒業できるに決まっているからである。むずかしい入試をくぐり抜けて、合格したぐらいだから、卒業できて当たり前だ。——世間や親や、本人はもちろん、東大の教員までそうを思いこんでいる。その結果、教育が空洞化する。卒業できるであろうという世間の期待が大きいので、就職が決まった学生を単位不足で卒業させなかったりすると、なんて不人情な教授だろうと非難が集中する。大学は共同体になり、一緒に合格した学生は、一緒に卒業させないといけない。入試は、共同体への加入儀礼なのだ。

大学を教育機関として再生させる。定員より多めの学生を入学させ、大学の専門で厳しくしごいて、一定のレヴェルに達しない学生はどしどし不合格、退学にする。卒業できるのが、半分たらずでもかまわない。大学に合格しても、卒業できると限らなければ、学生は本気で勉強するし、入学試験に受かっただけでは、世間に通用しなくなる。日本中の大学が、同じように、できない学生をどんどん落第させる。そう、卒業をむずかしくしておけば、入学試験はいくらでも簡単にできる。いっそのこと、なくしてしまうことだってできるのである。

東大生はおおむね、自分が東大生であることを隠したがる。世間の人びとも、まあ頭がおよろしいのね、とは言ってくれるものの、ガリ勉で世間を知らない、性格が偏屈、田舎者でダサイ、と陰でくさしている。入学してはみたものの、入試という目標を見失って、何をしたらいいかわからなくなる。大学で、専門の学問を学んでいる自分に、自信もプライドも持てないのだ。

大学に入学した時点でほめるからいけない。卒業してから、ほめればいい。そうすれば学生は、評価に値する人間になろう、一生通用する専門の学力を身につけようと頑張るだろう。その試練に耐え抜いた、卒業生としての誇りも生まれてくる。

妥協のない教育は、学生を落第させることを恐れない。それが学生に自信を取り戻させ、教育を再生する近道なのだ。

『ほんとうの時代』 第85号 pp.90～92 PHP研究所 1997.11.1発行

いま手を打たなければ破局的事態が到来する

地球が望むのは「子どものいない家庭」だ

橋爪大三郎 東京工業大学教授・社会学

特集 人生に子どもは必要か 6

第三世界の人口爆発が危機的状況を生み出す

その昔、人びとは子どもがいなくなることを心配した。旧約聖書は「産めよ、殖えよ、地に満てよ」と、神が祝福の言葉をのべたと記している。飢饉、戦争、疫病、……気まぐれな災難の一撃で、それまで繁栄していた民族がたちまち地上から姿を消した。そうならないためにも、子どもをしっかり産んで、育てる必要があった。

いま人間は、殖えすぎである。このまま増え続けると、百億人を突破し、二百億人に近づくという予測もある。地球の容量をオーバーするのは間違いない。

どうしてこうなるのか。第三世界に医療が普及し、死亡率が下がったのが原因である。それと同時に出生率も下がればよいのだが、それにはタイム・ラグがある。ヨーロッパ先進国の場合、出生率が下がって人口が安定するまでに、数百年ほどかかった。その間に、人口は数倍にふくれ上がった。日本の場合は、それが百年に縮まったが、やはり人口は増えた。第三世界はいままさに、人口爆発の真っ最中なのである。

先進国では、大学進学が当たり前になり、子どもは何かと費用のかかる存在になった。経済的負担を考えれば、子どもを何人もつくるわけにはいかない。そこで、結婚しない人びとや、結婚しても子どもをつくらない夫婦が増えてきた。

先進国の人口が減りぎみであることは、合理的である。なぜなら、先進国の一人当たり資源消費は、発展途上国の何倍～何十倍にもなっており、先進国の子どもが一人減れば発展途上国の子どもが五人や十人は生きていける計算になるからだ。もっとも、その程度では焼け石に水、遅かれ早かれ地球は人間で一杯になってしまうのではあるが。

「ひとりっ子政策」は画期的な成果ともいえる

人間を産むか産まないかは、伝統的に、家族(夫婦)が決定してきた。まことに「分権的」なやり方である。そして今後も、当分このやり方が続くものと思われる。人口は、こうした決定を集計して決まっていく。

つぎの世代を再生産するため、人びとは結婚し、夫婦は二人かそれ以上の子どもをもうける。――これが有史以来、すべての社会に共通のやり方だった。どんな権力も、ここに介入することはできなかった。「産めよ、殖やせよ」と出産を奨励することはできても、その逆に子どもの数を直接制限することはできなかった。生活苦や飢饉や税金のため、人びとが自発的に人口を制限する、という間接的なやり方だった。やがてこれでは追いつかなくなることが、目に見えている。

それでは政府が直接に、人口をコントロールしてしまおう。その試みが、中国の「ひとりっ子政策」である。毛沢東時代の人口政策の誤りの結果、中国では人口が爆発的に増加した。そこで七〇年代から、子どもは一人までという計画出産運動が始まった。この政策は、少なくとも都市部ではかなり厳格に守られている。おかげで中国の人口増加に、ようやくストップをかけることができた。画期的な成果である。が、無理やり避妊を義務づけるなど、共産党政権ならではのかなり強引なやり方も目立つ。よその国で簡単に真似をするわけにはいかない。

子どもの人数から家族の種類を分類してみると、

①夫婦に子ども二人かそれ以上
②夫婦に子ども一人
③夫婦だけで子どもなし

となる。これまで人類は、家族のモデルとして、例外なく①を採用してきた。ところが、このままだと、やがて否応なしに、③のタイプの家族が大量に生まれることになる。中国はそうなる前に、まだしも人道的な、(つまり、夫婦が親として子どもを育てることのできる)②を採用したケースだと考えられる。

つくらないエゴは肯定できるエゴだ

夫婦(もしくは家族)に、子どもは不可欠なものなのか?

これは実は、二重の問いなので、答えも二重になる。個々の夫婦について考えれば、子どもができない夫婦や、子どもをつくらない夫婦がいても当たり前で、彼らも立派な夫婦である。すなわち、夫婦に子どもは不可欠でない。しかし、総体について考えれば、すべての夫婦が子どもを持たないとしたら、世代の再生産が成り立たず、社会は存続できない。だから家族は、夫婦と子どもからなることになっている。それが文化なのである。この意味でなら、子どもは不可欠である。

先進国では、子どもの出生率が下がり、①の代わりに、②、③のタイプの家族の割合が増えている。これは、親(夫婦)のエゴにもとづく、自然の成り行きだ。そしてこのエゴは、先進国から発展途上国への資源の移転という意味あいを持つから、地球環境の視点から見ても肯定できるエゴである。つまり、よいことなのだ。

問題は、先進国の一部分が、①から②、③にシフトしたぐらいでは、間にあわないことである。第三世界の国々がこぞっていまただちに、①→②(ひとりっ子政策)をとった

伝えたいことがいっぱい。

コミュニケーション・インダストリー
TOPPAN
凸版印刷株式会社
本社 〒101 東京都千代田区神田和泉町1番地
●トッパンの情報はインターネットでもご覧いただけます。
http://www.toppan.co.jp/toppan/

なら、人口増はストップできるが、そんな強力な権力は存在しない。個々の家族にとっても、子どもの人数を制限するメリットは特にない。

そこで、自然の成り行き(親のエゴ)にまかせる以上に、子どもの人数を制限するシナリオを考えなければならない。たとえば、先進国で、半数以上の夫婦が子どもを持たない(③)選択をする。または、発展途上国で、過半数の夫婦が子どもを一人に止める(②)選択をする。そうでもしなければ、地球環境がもたないという現実がある。

この現実は、各国の政府(や国際機関)と、家族(や伝統文化)とのあいだに、大きな緊張を生み出すだろう。重要なので繰り返せば、世代の再生産は、人類の誕生このかた家族にまかされてきた。それが人間社会の、伝統文化の中核であった。人間は、やがて父・母となるであろうと期待され、社会的役割を習得し、社会のメンバーとして歩み出す。社会は家族と、それを前提にした行動様式のうえに組み立てられてきた。こうした伝統文化のシステムの根幹が、いま脅かされようとしている。そして人類は、新しい行動様式を習得することを迫られる。

日本こそ未来の規範を開拓するのにうってつけ

といっても、誰もが誰かを親として生まれるというやり方は、まだしばらく維持されるだろう。子どもであることは、人生の出発点である。その意味で、子どもであることは人生に不可欠である。しかし、その逆——子どもを持つことは、もはや人生に不可欠とは考えられない。人類に子どもは不可欠であっても、それを自分で産み育てることは、一部の人びとの贅沢にすぎなくなるだろう。

そんな状況下でも、子どものいない夫婦は、喪失感に悩まされるかもしれない。ちょうど親のいない子どもや、妻と死別した夫が喪失感に襲われるように。それは、営々と子どもを産み育ててきた伝統的な家族の役割期待に、まだ捕らわれているからなのだ。そうならないためには、地球上の多くの人びとが、家族の新しい規範——どのように個人生活を営めばよいのかという新しい行動の指針——を示されている必要がある。

急速に高齢化が進み、出生率も劇的に低下している日本やドイツこそ、こうした新しい家族の規範を示すのにうってつけなのではないか。〝地球にやさしく〟したければ、まず先進国が人口を劇的に減少させ、それでも社会や経済の活力を失わないという実例を示さなければならない。それは、高学歴の夫婦のエゴイズムではなく、二十一世紀の人類が遭遇する歴史的必然でもある。高齢化した先進国の逆ピラミッド型人口構成も、発展途上国のピラミッド型人口構成と重ね合わせれば、まったく正常の範囲内だ。養子、出稼ぎ、国際分業、あらゆる可能な手立てをつくして、先進国と発展途上国の共生の可能性をさぐる。それと同時に、子どものいない家族のほうが標準的だと考える、生活スタイルや価値観を打ち立てる。こういう意識革命の必要に迫られるのが、来るべき世紀なのだ。

こういうことを言うと、まさか本気ではないでしょうねとか、非現実的すぎるよとか言われる。なるほど、非現実的と思えるかもしれない。しかし、もしもこうした手を打たなければ、いまは想像さえできないような破局が現実のものとなろう。それを確実に予期できるなら、こうした家族の変貌を人びとが選択する決断が生まれるのだ。

人生に子どもは必要か。もしも人びとがYESとしか答えられなければ、将来世代の人びとは人生そのものを失う可能性が高いのだ。

はしづめ・だいさぶろう
1948年、神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現代社会の動きを踏まえて、新しい社会の展望をわかりやすく説く力量には定評がある。主な著書に「橋爪大三郎の社会学講義 〈1・2〉」(夏目書房)、「大問題！」(幻冬舎)、「性愛論」(岩波書店)、「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)など多数がある。

おまけ

週刊読書人
1997年(平成9年) 7月25日 (金曜日)

思想のミニマリズム

橋爪　大三郎著
橋爪大三郎の社会学講義2
新しい社会のために

社会問題への積極的な発言

そのスタンスにちょっとした違和感が

小阪修平

ぼくは以前から橋爪大三郎の文体に、倫理的な断念の明晰さとでもよべる質を感じてきた。それは余分なこと、たとえば「自己」のような決着のつかない問題を考えない決意のようなものである。だが、その質は橋爪が社会現象全般について積極的に発言するようになってどのように変化しただろうか。

『社会学講義』の続巻である本書では、社会問題について発言しようとする橋爪の積極姿勢が特に目立っている。扱われているテーマは大学の改革から宗教、破防法、そしていま岐路にさしかかった日本の進路にまでおよんでいる。それは、「日本は、むずかしい場所にさしかかったと思う」という認識が橋爪をつき動かしているからだ。だが、これまでの本にくらべこの本は、問題点とちょっとした処方箋の羅列としてしかぼくには読めなかった。それは橋爪が考えた「結果」のみを見せているからだろうが、啓蒙書という性格か、そのプロセスがぼくにはよく見えなかったからだ。むしろ現実的な諸問題に目をつぶらない市民主義といった政治的スタンスが見えてくる。

そういった橋爪の方法は、「思想のミニマリスト」ということばで表現されている。思想は思想自身に魅いられるためのものではなく、「自分が生きていくために、多くの人が共に生きていくためのものである。だから「シンプル・イズ・ベスト。思想は、単純な方がいい」、これが橋爪の言う思想のミニマリズムの中身である。この立場は同時に、異質な他者にたいして思想を開くといった橋爪の決意に裏打ちされている。

だが、そういったミニマリズムがどれほど共有のものとして成立可能なのか、それはどこかで社会を抽象的な諸個人の交通関係としてとらえる、理念的な市民社会の発想に移行してはじめて成立するのではないのか。ぼくにはそういう疑いがある。もちろん橋爪には、個人の思想を展開していることと、思想が、だからといって共通のものにはなかなかなりがたいことの間をどういうふうにつないでいけばよいのか。物事の過剰な意味づけを断念し、日常的な現実、あるいはぼくたちが生きていくうえで前提としなければならない「現実」に立脚するというのはたしかにひとつの方法ではある。そういう橋爪の勇気と努力を評価しないわけではない。だがこの本のなかで気になったところがあった。

たとえば、橋爪は将来予想される南北対立を念頭において、「先進国の気弱な若者たちが、気の迷いですがりつくタイプの宗教なのではなく、社会学という知識の累積を、応用しているのだという自負が背景にあるだろう。『社会学講義』が「日本語で社会学するために」の本であったとすれば、この本は日常だれもがつかう用語で社会を科学的に解明しようとした本だと橋爪は言う。だが、社会を「科学的に解明する」とはどのようなことだろうか。ぼくには、社会学が累積してきた概念と方法以上、以下のものではないように思える。

ぼくたちが、共通の制度的現実のなかで生きているように、必死で編み出される宗教だ」と言う。たしかに地球の将来を考えるといった立場に立てば、橋爪の言うとおりだろう。だが、こういったスタンスは、たとえ結論が出ないとしても考えるべき問題を考えるべきだというぼくのスタンスとは異なる。このちょっとした違和感は、どこかで、個人レベルの意味だけではなく、制度的な意味のレベルをどうとらえるか、そのための視線をどういうふうに設定するのかという問題にもつながっているはずだ。最後に、この本にはアジアという課題が底を流れているということも評価しておきたい。(こさか・しゅうへい氏＝哲学専攻)

A5判・394頁・2000円
夏目書房
4-931391-24-9

★はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「はじめての構造主義」「冒険としての社会科学」「民主主義は最高の政治制度である」「橋爪大三郎コレクション(全3巻)」「性愛論」など。一九四八(昭和23)年生。

『季刊トップ』 第13号 pp.30〜31 教育システム 1997.12.20発行

家族・学校・地域社会
我々にできること
なすべきこと

東京工業大学教授 橋爪大三郎

地域と教育を蘇らせる「家族連合」のススメ

● 変化は70年代に始まった ●

戦後、日本社会は貧困から抜け出すために、国民一丸となって突っ走ってきた。

70年代に入り、豊かさが当たり前になったとき、社会は進むべき方向を、個人は人生の目標を見失った。そのとき確実に信じられるものは何か。ただ一つ、自分の感覚や欲求である。こうしてこの国には、社会や国家に対する関心も、他人に対する責任や思いやりもない、自分のことだけを考える"自分に素直で忠実な"人間類型が確実に増加してきたのである。

こうした現状を教育について解きほぐしてみよう。

戦前、教育は大部分の人々にとってあまり縁のないものだった。旧制中学への進学率は1割程度。今の大学進学率よりもはるかに低い。ましてや高校や大学に進む人は一握りのエリートで、大部分の人は初等、中等教育を終わるか、終わらないかのうちに働いた。

ところが経済の高度成長と共に、教育は爆発的に普及した。皆、高い教育を受ければ、よりよい職に就くことができ、より豊かな生活を約束されると考えたのである。

70年代以降には、偏差値教育が登場した。偏差値は、同年齢の人間があたかもすべて大学まで進学するかのように成り立っている。もはや大学を出ただけではエリートでも何でもない。

子供たちには、小学校の頃から自分の進学可能な大学のレベルが示され続けた。「さほどの偏差値が得られないのなら、なるべく楽しく過ごし、大卒の肩書きだけを得ればよい」、偏差値とは、そうした省エネ装置でもあった。

偏差値の登場は、若者の気質を根本的に変化させた。大学は、教育機関というよりも骨休めの場所へとその地位を低下させ、中学や高校は完全に大学の予備校と化した。予備校化が禁じられている公立学校はレベルが低下するから、皆、塾や予備校へと通う。学校は勉強する場所ではなく、友だちと遊ぶ場所になったのである。

今の中学・高校では、学習意欲のない生徒たちをおとなしく教室に座らせておくことさえできない。欠席する生徒が増え、授業中に生徒たちが、トランプや麻雀までやっている。「出て行け」と言おうものなら、これ幸いと帰ってこない。それが教室の実態である。

今、子供たちは、あまりに長い青少年時代を生きている。何か面白いことはないかと、先も見えず目的もなく若者たちはさまよっている。この時期を過ごすために、一体何をすればいいのか。一体自分は何者なのか。そうした社会の期待と本人の自覚を促す明確な方法を、我々の社会はいまだ手に入れていない。こうした背景の中で、少年犯罪に変化が現れ始めた。

戦争直後、多くの青少年が犯罪に走った時代があった。戦後の混乱期、経済力の乏しい青少年にとって、犯罪は自力で問題を解決するための方法の一つだった。こうした青少年の犯罪は日本の経済成長と歩調を合わせて激減していく。環境要因による犯罪は、環境が改善されれば減少する。

ところが70年代を境に状況は一変する。従来なら犯罪に走るはずのなかった中流階級の青少年が、好きこのんで犯罪を起こすというケースが増え始めたのである。

例えば、暴走族。暴走するには自動車やバイクがいる。だから暴走族にしても、相対的に恵まれた環境が必要なのだ。校内暴力も援助交際もオヤジ狩りも、今の少年犯罪は経済的な困窮とは、おおよそ無関係に行われている。法に触れることに頓着せず、犯罪そのものを目的として犯罪を犯す。

● 学校改造計画 ●

今、我々がなすべきことは、学校も、家族も、地域も、もう一度、根本から考え直していくことだ。

学校は、まず教育機関としての機能を取り戻すことが必要だ。それには親や子供が学校を選択できるようにすると同時に、学校も子供を選べるようにすべきである。

現在は、義務教育の公立小中学校はもとより、高校も偏差値で輪切りにされ、一定のレベルの生徒たちが割り当てられるようになっている。どんなに学校に不適格な生徒であろうと、退学させることもできなければ、体罰も厳禁である。これでは学校はなす術がない。

手枷、足枷をつけたまま、子供を何とかしろと学校に要求し続けていたのでは、学校は本来の機能をますます低下させるだけである。学校はもともと学力を伸ばすためにあるのだ。

学校が生徒を選べるようにするには、学校に個性や特徴が必要だ。それには、まず校長に教師の採用から処遇までのすべての人事権を与えるべきだと思う。校長は、算数の学力を高めるとか、楽しい学校生活を約束するなどの独自の教育目標を掲げる。公約が満たされなければ交替させる。目標を達成するには、良い教師を選ばなければならないし、教師にもプロとしての自覚とプライドが芽生えてくるはずである。

● "家族トレード"のススメ ●

教育の主体は本来家庭だが、今は、家庭も教育に対応できなくなっている。大家族の頃は、子供は様々な状況を家族の中で学ぶことができた。しかし今は核家族・少子化が進み、しかも父親はほとんど子供と接する機会がない。すべては母と子の1対1の力関係で決まっていく。そして男子の場合、腕力において母親を圧倒した瞬間に、何でも子供の思い通りという状況が発生する。

その上、かつて家族がもっていた隣近所や親戚とのつながりも失われ、家族は個室という名の箱の中で孤立している。これが異常な状況であることを、まず意識しなければならない。

そうした自覚をもった両親であれば、できることはたくさんある。

例えば、週末にお互いの子供を取り替えて、相手の家に宿泊させる。そこで子供はよその家のルールを知ることができる。また、子供を一つの家庭に集めて泊め合えば、そこで擬似兄弟関係ができあがる。いずれの場合も、子供をお客さんとしてではなく自分の子供同様に扱うことが大切だ。

一つの家庭の手に余れば、いくつかの家族が連合することだ。そうした家族の連合があれば、地域社会は自ずと蘇ってくるだろう。

中高生になると居場所がないという問題がある。

学校と家庭の往復か、学校と家庭と盛り場の往復か——いずれにしても居場所がない。

アメリカには非行一歩手前の子供たちを預かって、家族同様に面倒を見てくれるオープンドアやホームドクターの制度がある。親の言うことは聞かなくても、他人の言うことは受け入れやすいものなのだ。

求められているのは必要性があって機能する、主体性のある地域社会の形成である。地域が学校と家庭の孤立をサポートし、様々な中間段階をつくっていけば、本来犯罪を犯すはずのない人間が犯罪を犯すことを食い止めることができるようになるだろう。

■ライオンとペリカンの会・講演会⑱■期日：11月８日(土)■

【橋爪大三郎・竹田青嗣両氏による車座講演会】

〈自分〉を生きるための社会科学

個・社会・歴史をめぐって――橋爪社会学VS竹田現象学

秋の講演会を開催する時期になりました。今回は、橋爪大三郎さんと竹田青嗣さんのお二人からお話を伺います。

講師として初めてお迎えする橋爪さんは、みなさんご存じのように、東京工業大学工学部教授であり、「社会現象と言語とは本質的に相関している」という“言語派社会学”の立場から、明快かつ実践的な社会学を推進・構築してこられた、今注目の方です。主な著書に、『言語ゲームと社会理論』、『はじめての構造主義』、『冒険としての社会科学』、「橋爪大三郎コレクション」（全３巻）、『性愛論』、『社会学講義』（Ⅰ・Ⅱ）があります。

これまで橋爪さんと竹田さんには、対談集『自分を活かす思想・社会を生きる思想』(1994年、径書房）がありますが、今年７月に刊行された小林よしのり氏を交えた鼎談『ゴーマニズム思想講座　正義・戦争・国家論』(径書房）では、従軍慰安婦問題や戦争責任、差別、市民運動などアクチュアルな話題の他、“個と社会”の関係像について本質的な論議を展開されています。

社会学と哲学という、ある意味では対極的な領域をご専門とされる橋爪さんと竹田さんですが、独自の思考原理に貫かれた明晰な語り口、生の現場から課題を汲み取りそれを社会に還元していこうとされる姿勢、そして何より、言葉と思想に対する誠実さが私たちに大きな勇気を与えるという点において、お二人に共通のものを感じずにはいられません。

今回の講演会では、まず橋爪さんに、個々の生にとって社会科学的な思考がどのような意味をもつのか、さらに社会思想において私たちが今何を考えるべきなのか、などについて語っていただき、続いて竹田さんに、“欲望－エロス論”の立場からその論点を引き継いだお話をしていただこうと考えています。

これまで私たちは、主として、「〈確信〉成立の根拠と条件」という現象学の根本的な考え方を竹田さんから学んできたのですが、そういった考え方を個々の現実や社会の中でどのように活かしていけばいいのか ― 。個・社会・歴史をめぐって、二つの思考原理の討論と交歓の場になることと確信します。

講演会の後は、博多湾の夜景を眺めつつ、鍋を囲んで大いに意見交換を行いたいと思います。会場及び事務処理の関係で、「予約いただいた方のみ／前金制」ということにさせていただきます。どうぞご了承下さい。もちろん初めての方も大歓迎ですので、ふるってご参加下さるようお願いいたします。

1997年10月

主催＝ライオンとペリカンの会
世話人代表＝森本旗江・高田雄造・別府大悟

橋爪大三郎さんからのメッセージ

経済学、政治学など、社会現象をさまざまな角度から研究する活動を、社会科学という。私の専門・社会学も、そのなかに入る。

社会科学は、地上のすべての人びとが、なるべく幸せに生きていくことができるために、役立つもののはずである。しかし、昨今の社会科学は専門化していてとっつきが悪く、自分とどんな関係があるのかわかりにくい。これは困ったことだと思う。

社会科学には、社会という現象を厳密に考えるという「科学」の面と、社会をよりよく運営するための「思想」の面と、両面があると思う。そして、専門化すればするほど、後者がなおざりになっていく。もともと社会科学は、自分たちの生きる社会がどういうものなのかという、共通了解を与えるものだったはずなのに。

私は、集団で生きる人間が人間であるための条件は何かと考え、それは言語であると思った。そして、人間が社会を営むあり方を考え、それは規則であると気づいた。そして、もっとも人間が生きやすいのは、規則が必要最小限である社会だと考えた（規則のミニマリズム）。ここに、竹田さんとの接点があると思う。今回は、そういうあたりを語りたい。

竹田青嗣さんからのメッセージ

かつて、ある対談で、「自分はある時点で、一度社会の問題については一切考えるのをやめようと決めた」と橋爪さんに言ったことがある。彼の応え。「ぼくもある時点で、もう自分のことをあれこれ考えるのは、いったんやめにしようと思った」……。以来わたしは、なぜか橋爪さんの思想をとても信頼している。

これも、橋爪さんがどこかで言った言葉（うろ覚えだが）。 ― われわれが考えるべきことは２種類。一つは、社会生活を営む上で考えておかないと困るような問題。もう一つは、人間として生きる上で考えておいたほうがよいようなこと ― 。

これは、橋爪と竹田の考え方の違いをとてもよく表現している気がする。おそらく、橋爪さんは前者から出発し、竹田は後者から出発している。いまのところ、わたしとしては、両者は相当近い場所に近づきつつある気がする。でも、ひょっとしたら、すれ違っていくかもしれない。ともあれ、社会原論と人間原論を交錯させられると面白いのだが。

『AERA』 第10巻第13号 pp.62～63 朝日新聞社 1997.3.24発行

立ち上がる事実の「物語」

村上春樹、ノンフィクションを書く

地下鉄サリン事件。そこで何が起きたのか。
小さな物語を集めて、新しい物語が紡がれる。
普通の人々が語る、普通の言葉を武器に
作家・村上春樹が「オウムの物語」と対決する。

「眠ると、必ず夢を見た。必ず見る。それもいつも同じ夢だ。誰かがやってきて、大きなハンマーで僕の頭をがつんと叩く」（『アンダーグラウンド』から）

鍵は、「物語」にある。

作家村上春樹が、初めてノンフィクションを手掛けた。

十四日発売の、『アンダーグラウンド』（講談社）。二年前の三月二十日に起きた、オウム真理教による地下鉄サリン事件を題材にしている。地下鉄に乗り合わせたことで、被害に遭い、今なお後遺症に苦しむ人たちのインタビュー集である。

村上春樹といえば、文学の意味や必要性が、曖昧にぼやけてしまった今の日本で、若い人にも共感をもって読まれる、稀有な「物語」の書き手だ。

優れた翻訳者でもあり、いくつかのノンフィクションを訳している。だが、彼の小説の主人公は、デタッチメント（かかわりのなさ）を求める象徴のようで、羊男や「やみくろ」といった、なぞめいた存在が登場することも多い。「村上ワールド」と呼ばれる現実から浮遊した独特の作品世界になじんだ読者にとって、現実社会にコミットするノンフィクションの執筆は、かなり意外にうつる。

村上春樹は、なぜ、ノンフィクションを書かなければならなかったのだろう。

彼はそのころ、米国に住み、事件の前後は一時帰国していた。

「事件後しばらくのあいだ、（略）オウム真理教関係のニュースが氾濫していた。（略）でも私の知りたいことは、そこには見当たらなかった」

『アンダーグラウンド』の長い長い著者あとがき（「目じるしのない悪夢」）に、村上はそう書く。

事件が起きた時、地下鉄の列車の中に乗り合わせた人は、何を見て、どのように行動し、何を考えたのか。

「知りたいこと」

の答えを探して、村上はインタビューを開始した。

むらかみ・はるき／1949年生まれ、早大卒。ジャズ喫茶経営を経て、執筆活動に。『ノルウェイの森』が大人気を集め、「現代の夏目漱石」との声も

村上春樹が迫う。地下鉄サリン事件。

語られぬ「物語」を求め

サリン事件では、十一人が亡くなり、三千八百三十三人の被害者が出た、とされる。村上は、二人のリサーチャーの力を借りて被害者百四十人余りを探し出し、承諾の得られた五十二人と、遺族や関係者八人にインタビューした。取材には、まる一年かけた。

多くの証言を丹念に集め、そこから事実を浮かび上がらせる。村上の取材は、不条理な犯罪に巻き込まれた人々が、「被害者たち」というひとくくりの枠組みの中に置き去りにされるべきではないという確信と、一人ひとりに語られていない「物語」がある、という前提にもとづいている。

インタビューは、地下鉄の路線ごとにまとめられた。

冒頭に出てくる千代田線の乗客の証言は、乗り合わせた航空会社の女性社員、営団職員、テレビ局と契約した車の運転手、といった順に続けられていく。一人の記憶に出てくる人物が、後で証言者として登場する。証言がつながり、あるいは交錯することで、事実が立ち上がってくる。

ただし、証言がすべて緻密に構成されたわけではない。被害者の総数に対して証言者は圧倒的に少なく、証言で構成されるべき事実には、少なからず死角ができている。

インタビューでは、いくつもの興味深い事実、深刻な実態が明らかにされている。

パニックの中で、乗客同士による救助の試みが、かなり、なされていたこと。身体的な後遺症だけでなく、事件による心的外傷性ストレス障害、いわゆるPTSDに苦しむ人が多く、職場を変わったり、管理職をはずれたりしていること。

未だ癒されぬ苦しみ

ある被害者の男性は、犯行を指揮したとされるオウムの井上嘉浩被告と高校の同級生だった。事件後そのことを知り、

「すげえ腹が立った」

と言う一方で、教祖と対決姿勢を見せる井上に関する報道は目を離さずに見ている、という。

一時は植物人間の状態にまでなり、今も病院でリハビリの過程にある女性にも、インタビューを試みている。

サリン被害者のPTSD治療にあたっており、今回インタビューも受けた、九段中野クリニックの中野幹三院長は、

「後遺症の苦しみから『死にたい』という言葉を聞くこともたびたびです。サリン事件では被害者の視点が忘れられていると感じます。だから、簡単なことではないが、敢えて被害者の話を聞こうという村上さんの姿勢に共感します」

と、言う。

いまだに「怖かった」と口に出せない人がいる。言葉にできないことで身体に異常が出てくる。

人間への信頼感が不条理にたたき壊された。そこをどう回復していくかが問題なのに、周囲の理解は得られず、無遠慮な言葉を投げられ、さらに傷を深める。

インタビューに登場する、ある被害者はこう語っている。

「こっちは苦しかったけど、逆に周りはいささか面白がっているような部分さえありましたね。面白おかしくというか……」

マスメディアを通じて事件を眺めている人間は、オウムに対して、薄気味悪さと同時に、ある種のおかしみを感じてしまっている。おそらく、麻原彰晃こと松本智津夫被告の生み出した「物語」が、あまりにも荒唐無稽で稚拙だったことと関係しているのだろう。

事件を描く第四の場所

東京工業大の橋爪大三郎教授（社会学）は、村上春樹があとがきでたびたび使う、「大きな乗合馬車」と「ジャンク」という言葉に着目する。

麻原は、「ジャンク」（ゴミやまがいもの）をつなぎ合わせて悪意の「物語」を提供した。マスメディアは、正義が悪を告発する、という立場の「大きな乗合馬車」で人々を運んだ。

麻原と被害者、麻原とマスメディアはそれぞれ対立関係にある。これをひとつの三角形とするなら、マスメディアと向かい合う見えない「対角線」上に、第四の場所がある。

「村上春樹はここに場所があることに気付き、この位置に立ってするべきことがわかった。被害者のミクロの物語を集め、マクロの物語を書くことです。彼にとっては、本質的で必然ともいえる試みだと思う」

オウムの事件が起きた時、

「現実がフィクションを凌駕した」

と、言われた。村上春樹は、新聞のインタビューで

「僕はそうは思わない」

と話している。そして、自分のやり方で、現実と対決した。

精神科医の香山リカさんは、

「事件後、日本の小説や演劇は変わるだろうと言われましたが、まったくといっていいほど影響を受けていない。日本を離れていることも多かった村上春樹一人が、問題意識を純化させ、持ち続けたということなんでしょうか」

と、話す。

編集部 山脇文子

女盗賊プーラン 上・下
プーラン・デヴィ／武者圭子訳
最下層カーストとして数々の虐待を受けた少女は、ついに盗賊団を率いて復讐に立ち上がる！ 獄中生活を経て国会議員になった元女盗賊が驚愕の半生を語る。定価各1648円

10刷
平気でうそをつく人たち
虚偽と邪悪の心理学
M・スコット・ペック／森 英明訳
一見いい人なのに、いつもいやな気持にさせられるのはなぜ？ 著名な精神科医が、身近な人間の邪悪さを鮮やかに分析。生きるうえで助けになる必読の書！ 定価2266円

ソヴィエトの悲劇
ロシアにおける社会主義の歴史1917～1991
(上・下)
M・メイリア／白須英子訳
強大にみえたソ連は、なぜトランプの家のように崩壊したのか？ その真因を明らかにした画期的労作。読み始めたらやめられないほどの面白さ！ 定価各3605円

草思社 定価は税込
〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26
☎03(3470)6565 振替00170-9-23552